広域科学専攻「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」
事後報告書(生命環境科学系 丹野研究室 修士 2 年 星野翔)

本報告書は、標題の助成を受け、47th EABCT(European Association for Behavioural and Cognitive Therapies: ヨーロッパ行動療法認知療法学会)へ出席した際のレポートである。EABCT は 2017 年 9 月 13 日から 16 日まで開催され、ヨーロッパ内に限らず臨床家・研究者が幅広く参加する国際会議である。

私は全日会議へ参加し、3 日目にはポスター発表を行った。会議は初日のオープニングセレモニーから、数多くの熱気あふれる議論で盛り上がっていた。私は本会議が国際会議出席の初回であったが、初対面の研究者・臨床家同士でも非常に活気的な会話がなされており、私自身もその良い雰囲気の恩恵に大いに与るところとなった。また、期間中、専門内外の数多くの発表に触れ、幅広い知見を得るよい機会となった。

特に 3 日目のポスター発表においては、普段の心理学を主とした研究者とは異なる視点を持つ、臨床家からのコメントを数多く頂き、意義深いものとなった。私が専門とする強迫症研究における第一人者、P. Salkovskis 氏をはじめ、様々な臨床家から、実験心理学と臨床場面の差異・利点欠点に関するコメントを頂いた。本分野の専攻は修士課程に入ってからのものであったが、考察を深める上で大変意義深い時間になったと確信するものであった。今回の機会を活かし、自身の研究へさらなる発展を加えたいと思う。

最後に、この度貴重な機会を頂くに至り、広域科学専攻の助成システムに感謝の意を表します。また、お忙しい中細やかに助力頂いた丹野教授と、日程の多くをご同行いただいた上智大学の西口さんへ、心より感謝申し上げます。